掘り込み面はこれより上層であることは確実である。掘り込みは明確ではなかったが、平面形は円形で、断面形は浅い箱形を呈する土坑である。土坑内には大型の哺乳類の骨が1体分（推定）検出された。骨は重機で削平されており、残った部分からは各部位の配置は分からない。骨自体も残存状況が悪く、骨粉化していた（場所ごとに番号を付して取り上げた）。歯も重機掘削時に削平されていたが、状態良く残っていたものを図版16-3に写真掲載した。なお、動物遺体は歯から類推するに、馬と思われる。遺構の覆土は褐色土1層である。出土遺物は覆土から縄文土器1点、須恵器3点の破片が出土しているが、掲載するものはない。

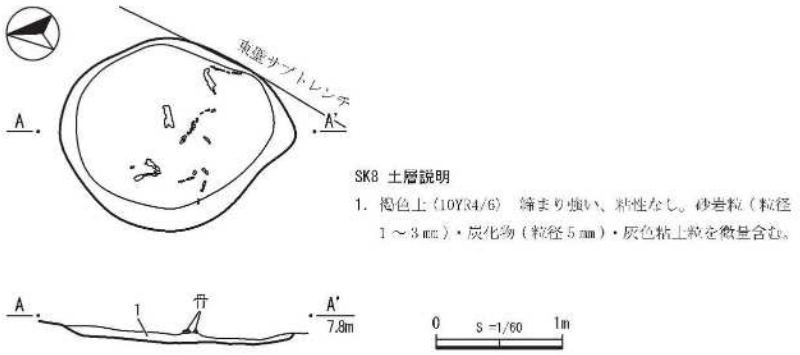


図31　SK8

2. 包含層出土遺物

遺物は、層位ごとの取り上げを基本として、肉眼での目視により分別を行ったが、現場では1層ごとを分別するのは難しく、概ね土色の変化する単位で取り上げた。このため1層ではなく、複数の層をまとめて取り上げている。以下では、時代別に大別し、材質単位で分類して記述する。

a. 縄文時代

縄文土器や石器（剥片も含む）が上層調査でも、下層調査でも出土量は少量であった。層位ごとの出土状況は次のようである。

［土器］Ⅱ-3～5層2点、Ⅱ-9層1点、Ⅱ-14層1点、Ⅳ層 4点。

［石器（剥片含む）］Ⅱ-1層 1点、Ⅱ-3層 2点、Ⅱ-3～5層 1点、Ⅱ-5層 1点である。

土器8点と石器1点の実測図を図32-1～9に掲載した。土器の時期は早期から中期後半までみられた。図32-1は早期の尖底深鉢の底部のみ残存している。2は前期前半の繊維を含む土器の胴部片である。3･4は前期後半の深鉢の胴部片で、3は横位の平行沈線文が、4は横位の貼付の浮線文の上から単節縄文と、下位には撚糸文が施されている。5は中期前半の胎土に雲母を含む深鉢の底部片で、縦位の撫で付け痕が複数残る。6～8は中期後半の深鉢の胴部片で、6は単節縄文、8は縦位の条線文が施される。7は縦位の条線文の上から波状の浮線文が貼り付けられる。9は石錘で、上端に僅かな窪みがつけられている。

b. 弥生時代

弥生土器の層位ごとの出土状況は以下の通りである。

Ⅱ-1層8点、Ⅱ-2～5層75点、Ⅱ-3層より上層1点、Ⅱ-3層1点、Ⅱ-3～5層18点、Ⅱ-5層19点、Ⅱ-7～9層3点、Ⅱ-9層15点、Ⅱ-9・10層4点、Ⅱ-9～12層17点、Ⅱ-11層2点、Ⅱ-2層1点、Ⅱ-13層1点、Ⅱ-13～16層30点、Ⅲ-1・2層53点、Ⅳ-1・2層2点。

なお、このうちⅢ-1・2層出土の53点は、東壁サブ・トレンチ（D・E-5区）の出土である。実測遺物の図32-11・15

～17・19、図33-1・2の7点を掲載する。

実測図を掲載したのは14点で、図32-10～20、図33-1～3に提示した。時期は中期宮ノ台式期が5点（図32-10～12・15・17）、他は後期である。器種は図32-10～15・17は壺、16・18は甕、19・20は台付甕、図33-1～3は高坏である。図32-10は口縁部片で、口縁先端部が大きく広がり、口縁端部は受け状になる器形である。外面には単節縄文が施され、内面には赤彩が僅かに残る。11は胴部片で、沈線区画内に羽状縄文が施される。沈線区画外の下位には縦位の刷毛目が残る。12は小型の頸部の長い壺の口縁部で、口唇部に縄文、外面には連続する爪形文、その下には横位の沈線が施される。13は素口縁、14は折返し口縁である。15は櫛描き文で上下に横線を引き、その間には波状の櫛描き文が施される。16は口縁に刻みがつけられている、17は底部が突出しており、胴部最大径は下位にある。上半を欠いた後に、下半部のみで再利用している。粘土帯の接合部が割れ口になっており、割れ口の調整はされていないようにみえる。外面には刷毛目がみられる。18は上半部で、調整の刷毛目は胴部に薄く残る。19・20の成形法は甕部の底部凸状の突出部を脚台部上部にはめ込んでいる。図33-1は体部内外面に磨きの痕跡が部分的にみられる。2は脚台部であるが、内外面には磨きが施されるが、刷毛目がところどころ残る。裾部端部の内面は削り取られたような痕がみられる。3は脚台部が長めのものである。

c. 奈良・平安時代

当該期の遺物の主要なものは土師器と須恵器である。層位ごとの出土点数は次の通りである。なお、この他に年代の特定の難しい木製品や石製品（出土数は少量）もみられるが、全体でみると最も遺物量が多いこの時代に記載した。

［土師器］ 1層17点、Ⅱ層30点、Ⅱ-1層98点、Ⅱ-1～5層3点、Ⅱ-2層4点、Ⅱ-2～5層76点、Ⅱ-3より上層63点、Ⅱ-3層10点、Ⅱ-3～5層554点、Ⅱ-4層53点、Ⅱ-5層205点、Ⅱ-6層4点、Ⅱ-7層3点、Ⅱ-7層以下88点、Ⅱ-7～9層92点、Ⅱ-7～11層1点、Ⅱ-9層128点、Ⅱ-9・10層34点、Ⅱ-9～12層91点、Ⅱ-9～16層1点、Ⅱ-13～16層85点、Ⅲ-1・2層95点。

［須恵器］ Ⅰ層2点、Ⅱ-1層8点、Ⅱ-2～5層17点、Ⅱ-3層より上層9点、Ⅱ-3層3点、Ⅱ-3～5層44点、Ⅱ-4層8点、Ⅱ-5層29点、Ⅱ-7層7点、Ⅱ-7層以下5点、Ⅱ-7～9層6点、Ⅱ-9層14点、Ⅱ-9・10層6点、Ⅱ-9～12層38点、Ⅱ-13～16層33点、Ⅲ-1・2層1点。

［灰釉陶器］ Ⅱ-2～5層1点、Ⅱ-4層2点、Ⅱ-5層12点、Ⅱ-7層以下2点、Ⅱ-9層1点、Ⅱ-9～12層1点、Ⅱ-9～12層2点。

［緑釉陶器］ Ⅱ-13～15層 1点のみ。

このうち実測図を掲載したのは、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器と石製品の計32点で、この他に木製品と石製品の一部、土製品を写真のみ掲載した。以下に、これらを材質別に記載した。

土師器 図33-4～18に15点提示した（14・15はロクロ土師器）。器種は図33-4～13が坏、14は高台付坏、15は皿、16～18は甕である。4～13の坏は調整の不明瞭なものもあるが、外面の体部下半に単位の幅の狭い横位の削りが連続するいわゆる相模型坏である。底径が大きく口径との比が小さい7～13と、底径が小さく口径との比率の大きい4～6に大別される。14は焼成が良く、器面は滑らかに仕上げられている。底部内面には擦れた痕がみられる。皿の器形は本遺跡では少なく、実測遺物では、SI2の図16-10があるのみである。16・17は口縁がくの字形に屈曲する甕である外面の肩部には横位の削りがみられる。18は大型の球胴形の甕である。胴部の器壁の薄さは17と共通するものがある。

須恵器 図34-1～8に8点掲載した。器種は1～5は坏、6～8は高台付坏である。1・2・5は底部回転糸切の後、その周囲を回転削りしている。5は大ぶりである。6～8は付高台で、高台内には回転糸切が残っている。7は、通常の坏に小さな高台が付けられているが、6・8は、底部と体部の器壁が厚いので大型の坏である。

灰釉陶器 図34-9～12に4点掲載した。器種はいずれも碗で、9は高台が形骸化しており、底部と高台の高さはほぼ同じである。内面全面に灰釉が掛かる。10は明確な付け高台で、高台内には成形時の回転削り痕か糸切痕が残る。内面は灰釉が掛かる。11は高台内の中央に糸切痕がわずかに残り、内面から外面体部の上半に灰釉が掛かる。12は短頸

壺の口縁部から胴部上半の破片である。外面の釉は焼成温度が高くなり過ぎたのか殆ど剥落している。

緑釉陶器　図34-13に1点提示した。緑釉陶器の皿と推定する高台部の破片である。緑釉はすべて剥落している。

木製品　図版15-3に、3点の写真を掲載した（写1～3）。写1・2は円弧を描く縁をもつ板状木製品である。写1は円弧の縁から1cm位の幅で小さな段がつけられている。写2には段差はない。どちらも縁の面は垂直である。釘穴もみられない。写3は大型の加工痕のある木材である。長さ160cmを測り、片面には樹皮は残らないが木肌が残るものの、腐食は内外共に進んでいる。板目面には幅の広い工具による平らな削り痕が100cm以上にわたってつけられている（例えばヤリガンナなど）。出土層位はC-5区のⅣ-1・2層（地山直上層）であるが、この工具痕は時代が下ると思われる。

石製品と転用石製品（砥石）　火打石2点（図版16-1-写1・2）、砥石と転用砥石4点（図34-14～17、図版16-1）、支脚と炉石4点（図版16-1-写3～写6）を掲載した。火打石：2点共にチャート製で、稜線の一部には火打ち金との敲打による稜線の潰れがみられる。砥石：図34-14は欠損部分が多いが、砂岩製の手持ち砥と思われる。図34-15～17は須恵器の甕の破片を転用した砥石で、15・16は手持ち砥で1面使用である。17は口縁部下半から肩部の破片で、口縁部は割れ口を再利用しての置き砥と肩部の割れ口を再利用した手持ち砥と破片の割れ口を上手く利用している。支脚と炉石は、いずれも軟質の砂岩製で直方体か円柱状に面取り加工してある。細かい記載は、各竪穴建物の出土遺物の項にした。

d. 中世

材質別では陶器、土器で、総数20点が出土した。そのうち、実測図掲載遺物は5点、写真掲載4点の計9点である。出土場所は、全20点の内、17点が「溝」内であり、その層位はA～C-5・6、C-7区　Ⅰ-1・3層、Ⅱ-4・5・9層である。他の3点の層位はⅠ層とⅡ層の上層である。「溝」は近代の盛土層であり、この時代の遺物は混入である。Ⅱ層も時代は古代であることから混入と考える。以下、個体の説明に移る。実測図掲載図35-1～5の1・2は常滑産捏鉢の底部片で、山茶碗タイプのものである。1の方が大型である。どちらも内面は良く擦れている。3～5はかわらけである。4・5は底部外面は回転糸切痕を残す。3は底部に焼成後の穿孔がみられる。燭台の受け皿と思われる。図版15-1-写1～写4は瓦器（写1）と陶器（写2～4）の細片である。写1は樟葉型瓦器埦で、磨きが内外に施されるが、隙間があり雑である。写2は直口縁の古瀬戸の大皿、写3も古瀬戸の縁釉皿である。写2、写3はどちらも焼成が悪く、釉は白濁している。写4は常滑産大甕の胴部片で、外面の長軸方向に擦れがみられる。

e. 近世・近代

合計で10点出土した。この時代の遺物も中世同様に、出土場所は概ね「溝」内（A～C-5・6、C-7区　Ⅰ-1・3層、Ⅱ-4・5・9層）であり、表土直下、もしくはⅡ層の上層である。層位的にはⅡ層は古代に遡る層であるが、「溝」内は近代の盛土層であることから混入と考える。この出土状況は、上記の中世の遺物と同様である。いずれも細片や小片が殆どである。写真掲載6点を図版15-2-写1～6に掲載した。写1～5は染付磁器（写3・5は人工呉須）で、器種は写1～4は碗、写5は段重である。写1は肥前産、写2～5は瀬戸・美濃産である。写1の外面は菊花文で、内面口縁部には2重圏線が回る。写2は端反形で、外面には「寿」の文字文と花文が描かれる。内面口縁部は帯状圏線が回る。焼成が悪く器面は白濁している。写3・4は平碗形で、写3は体部外面に型紙摺で如意頭文と窓絵菊花文が、底部内面にも菊花文がみられる。写4は内面に瓜文が描かれる。写5は外面に如意頭文崩れの上は型紙摺のミジンコ唐草文を施す。写6は陶器の土瓶である。口縁部内面には受部が張り出している。外面には鉄と緑釉斑でおそらく山水文が描かれる。年代は写1・2・6が近世の19世紀前半、写3～5は近代の19世紀末である。写真のみ図版16-4-写1に掲載したのは、鉄道の枕木を止め付けた犬釘で表面採集品である（写1の右端の釘は長さ145mm）。本遺跡の前身は、昭和20（1945）年に発足した、日本国有鉄道大井工機部大船工場であり、平成18（2006）年に閉鎖されたJR東日本鎌倉総合車両センターであった。

上記では、時代ごとの出土傾向をみるために、遺物の材質別、層位毎に点数を集計した。縄文土器と石器の数は極少

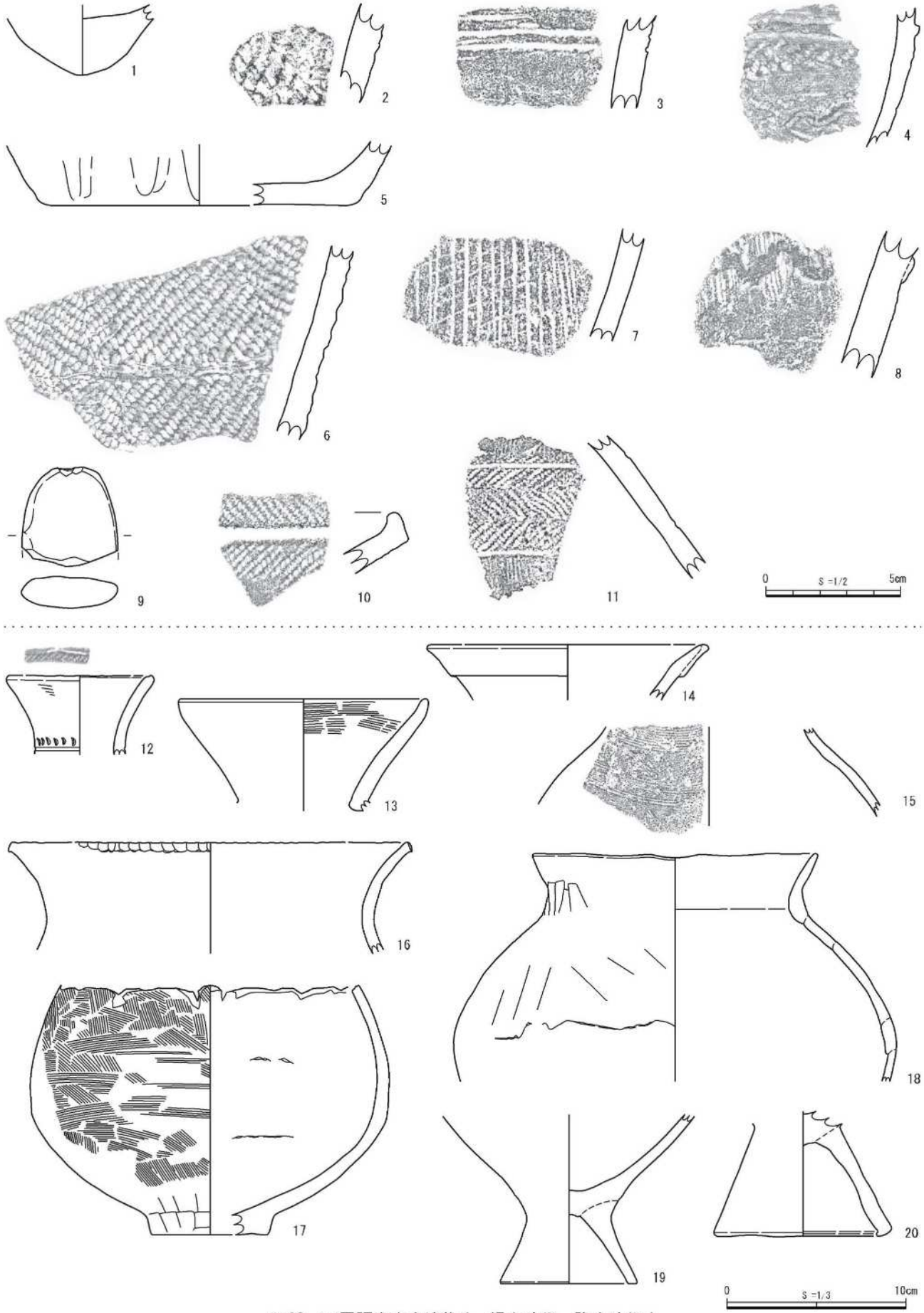


図32　下層調査出土遺物１　縄文時代、弥生時代１

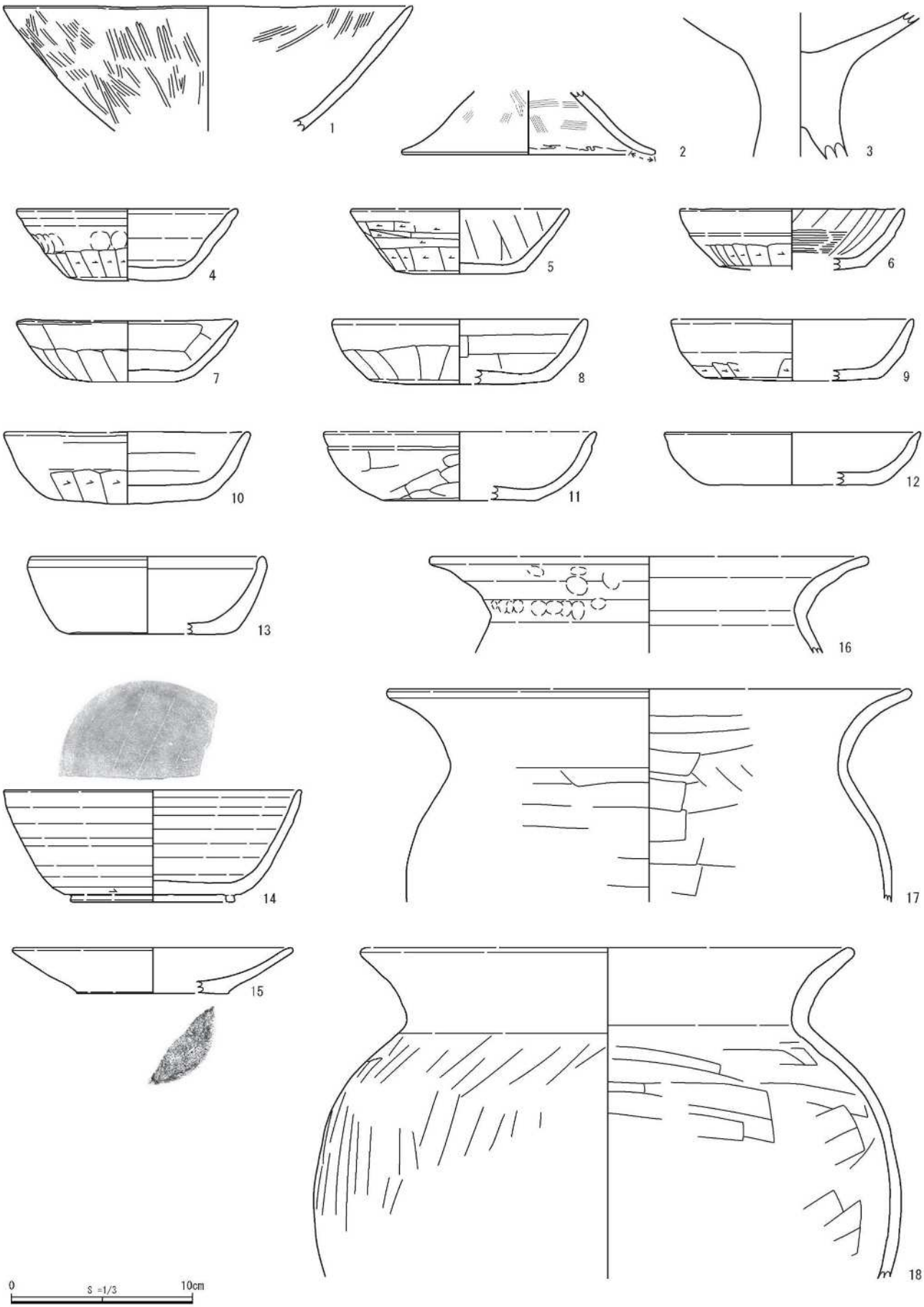


図33　下層調査出土遺物２　弥生時代２、奈良・平安時代１

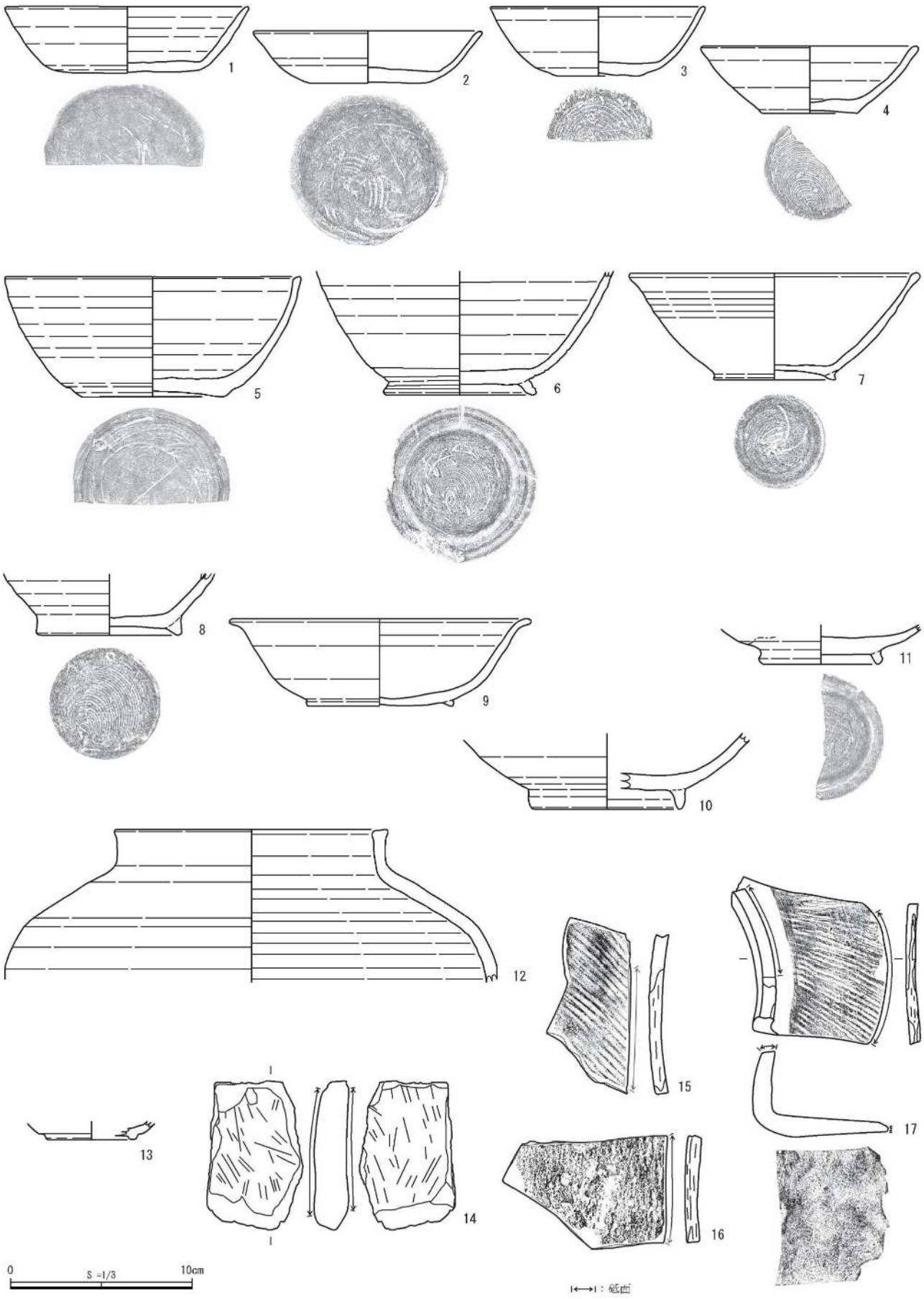


図34　下層調査出土遺物３　奈良・平安時代２

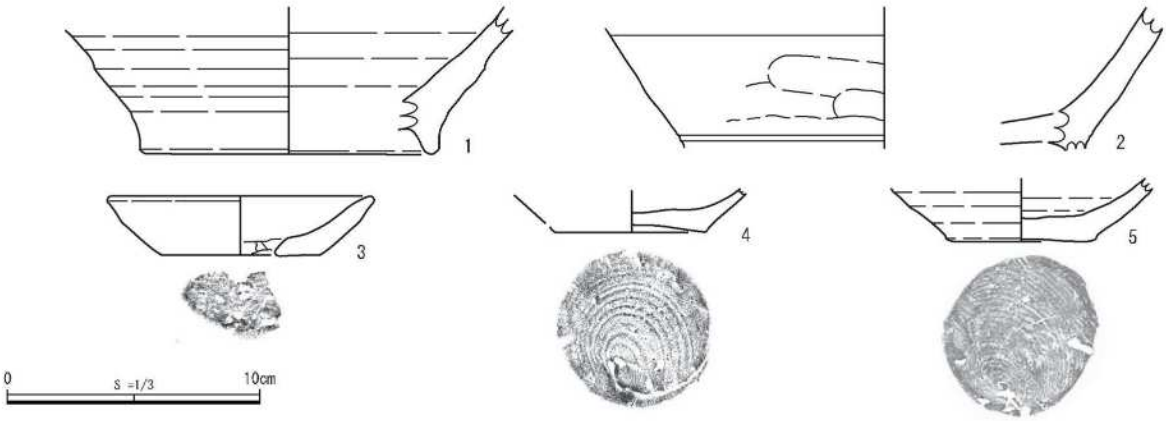


図35　下層調査出土遺物5　中世

表9　下層調査 縄文土器観察表

寸法欄：残は残存値を表わす。

番号	材質・器種 出土場所	寸法（cm）	器形・文様・調整・残存等	胎土・焼成・色調	備考
図32-1	縄文土器 尖底深鉢 SI2	口径：　— 器高：残 2.6	**文様**：無文。／**残存**：尖底部。	小礫多量 良 橙色7.5YR6/6	被熱 時期：早期
図32-2	縄文土器 深鉢 不明	口径：　— 底径：　— 器高：残 3.8	**文様**：無節縄文。	繊維 良 黒色10YR2/1	胎土は黒色化。 時期：前期前半
図32-3	縄文土器 深鉢 C-4 Ⅳ1・2層	口径：　— 底径：　— 器高：残 3.5	**文様**：外面横位の沈線文。／**残存**：胴部片。	砂粒 良 にぶい橙色5YR6/3	胎土は黒色化。 時期：前期後半
図32-4	縄文土器 深鉢 C-1 Ⅳ-1・2層	口径：　— 底径：　— 器高：残 4.3	**文様**：上部に貼付の浮線文、その上からに縄文、下位には撚糸文。／**調整**：内面撫で。／**残存**：胴部片。	長石 良好 黄灰色2.5Y4/1	胎土は黒色化。 時期：前期後半
図32-5	縄文土器 深鉢 D-4 Ⅱ-3～5層	口径：　— 底径：復11.4 器高：残 2.3	**文様**：外面体部縦位の雑な撫で付け、内外面底部撫で付け。／**残存**：底部1/4。	砂粒、雲母 良好 にぶい黄褐色10YR5/3	時期：中期前半
図32-6	縄文土器 深鉢 SK5(E-3)	口径：　— 底径：　— 器高：残 7.2	**文様**：単節縄文。／**調整**：内面磨き。／**残存**：胴部片。	緻密 良好 にぶい黄褐色10YR5/4	時期：中期後半
図32-7	縄文土器 深鉢 C-1 Ⅳ-1・2層	口径：　— 底径：　— 器高：残 4.2	**文様**：外面縦位の条線文。／**残存**：胴部片。	砂粒 良 黄灰色2.5Y4/1	胎土は黒色化。 時期：中期後半
図32-8	縄文土器 深鉢 C-5 Ⅳ-1・2層	口径：　— 底径：　— 器高：残 5.5	**文様**：外面縦位の沈線文の上に波状の浮線文。／**残存**：胴部片。	砂粒 良 黒褐色2.5Y3/1	胎上は黒色化。 時期：中期後半

表10　下層調査 縄文時代石器観察表

寸法欄：残は残存値を表わす。

番号	器種 出土場所	寸法(cm)・重量(g)				特徴・使用痕	石質	備考
		長さ	幅	厚さ	重量			
図32-9	石錘 ＊	残3.7	3.6	1.2	23	上端を打ち欠いて細ませる。断面形は楕円形。下半欠損。	頁岩	

＊A～C-5・6、C-7 Ⅰ-1・3層・Ⅱ-4・5・9層

表11　下層調査 弥生土器観察表（1）

寸法欄：復は復元値，残は残存値を表わす。

番号	材質・器種 出土場所	寸法（cm）	器形・調整・文様・残存等	胎土・焼成・色調	備考
図32-10	弥生土器 壺 D-4 Ⅱ-3～5層	口径：　— 底径：　— 器高：残 2.7	**器形**：口縁は大きく開き、短かい口縁端部は受け口状。／**文様**：口縁端部から口縁部外面単節縄文、内面赤彩残る。／**残存**：口縁部片。	砂粒 良 橙色7.5YR6/6	時期：中期宮ノ台式期。
図32-11	弥生土器 壺 D-4 Ⅲ-2層	口径：　— 底径：　— 器高：残 4.8	**文様**：外面胴部横位の沈線の間に羽状縄文帯、沈線の外側は縦位の刷毛目文。／**残存**：胴部片。	小礫 良 にぶい黄橙色10YR7/3	時期：中期宮ノ台式期
図32-12	弥生土器 壺 D-5 Ⅱ-10層	口径：復 8.2 底径：　— 器高：残 4.4	**器形**：壺、頸部中位は窄まり、口縁部に向けて開く。／**文様**：口唇部単節縄文、頸部列状(横位)の爪形文の下に横位の沈線、うすく縦・横位の刷毛目残る、内面口縁部横位の刷毛目残る。／**残存**：口縁部片。	白色針状物質 良 灰白色5YR7/1	時期：中期宮ノ台式期。胎土は黒色化。
図32-13	弥生土器 壺 B-4 Ⅱ-3～5層	口径：復14.0 底径：　— 器高：残 6.3	**器形**：口縁部は高さがあり、急な角度で立上がる、胴部へはL字形で繋がる。／**成形**：口縁部と胴部は貼付。／**調整**：内面に横位の刷毛目が薄く残る。／**残存**：口縁部片。	砂粒 良 橙色7.5YR6/6	内外面器面荒れる。 時期：後期。
図32-14	弥生土器 壺 B-5 Ⅱ-3～5層	口径：復15.6 底径：　— 器高：残 3.1	**器形**：折返し口縁。／**成形**：外側への折返し。／**調整**：内面、外面頸部縦位の、口唇部横位の磨き。／**残存**：口縁部片。	小礫 良好 灰黄色2.5Y6/2	時期：後期。

表11　下層調査 弥生土器観察表（2）

寸法欄：復は復元値，残は残存値を表わす。

番号	材質・器種 出土場所	寸法（cm）	器形・調整・文様・残存等	胎土・焼成・色調	備考
図32-15	弥生土器 壺 E-4 Ⅲ-1・2層	口径：　－ 底径：　－ 器高：残 5.5	**文様**：外面胴部横位の櫛描文の間に波状の櫛描文。／**残存**：胴部片。	小礫多量 良 橙色5YR7/8	内面器面荒れる。 時期：中期宮ノ台式期。
図32-16	弥生土器 甕 C-5 Ⅱ-13層	口径：復22.4 底径：　－ 器高：残 6.0	**器形**：口縁部は緩いU字形に立上がる、口唇部に刻み目。／**調整**：内面口縁部横位の撫で、頸部横位の（単位幅の小さい）篦り、外面口縁部横位の撫での上から部分的に撫で消し。／**残存**：口縁部片。	砂粒 良好 黒色7.5YR1.7/1	内外面煤付着。 時期：後期。
図32-17	弥生土器 壺 E-5 Ⅲ-1・2層	口径：　－ 底径：　6.6 器高：残13.9	**器形**：小さい底部は突出する、底部～胴部下半は大きく開きながら立上がる、下位に最大径、上方に向けては年まり加減。／**調整**：内外面胴部斜位の刷毛目。　**残存**：下半以下3/4。	小礫 良好 にぶい黄橙色10YR6/4	下半以下だけ残して再利用（粘土紐接合部で欠損）。 時期：中期宮ノ台式期。
図32-18	弥生土器 甕 E-5 Ⅲ-1・2層	口径：復16.0 底径：　－ 器高：残12.7	**器形**：口縁部はくの字形で外反し、胴部は強く張る。／**調整**：内外面胴部斜位の刷毛目、内外面口縁部横撫で。／**残存**：口縁部全部と胴部上半1/3。	小礫多量 良 褐色10YR4/6	時期：後期。
図32-19	弥生土器 台付甕 D・E-5 Ⅲ-1・2層	口径：　－ 台部径：7.6 器高：残 9.4	**器形**：脚台部はハの字形に開く、甕胴部下半は開きながら立上がる。　**成形**：甕部底面の凸部を脚台部上端の穿孔に嵌め込む。／**調整**：甕胴部内外面斜位の刷毛目、脚台部内面上半縦位の、下半横位の逆続する刷毛目、外面上中位縦位の、下位横位の撫で。／**残存**：脚台部全と胴部下半の一部。	小礫 良好 橙色5YR6/6	内外面被熱し、甕部の外面の一部剥落。 時期：後期。
図32-20	弥生土器 台付甕 D-4 Ⅱ-3～5層	口径：　－ 台部径：10.0 器高：残 7.0	**器形**：脚台部はハの字形に開く。／**成形**：甕部底面の凸部を脚台部上端に接合。／**調整**：内面横位の削り、外面撫で。／**残存**：脚台部4/5。	小礫多量 良 にぶい黄橙色10YR6/3	外面被熱。 時期：後期。
図33-1	弥生土器 高坏 E-5 Ⅲ-1・2層	口径：復22.8 底径：　－ 器高：残 6.9	**器形**：体部は直線的に開く。／**調整**：内面器面荒れており観察不能、外面縦位の磨き。／**残存**：体部1/3。	砂粒 良 にぶい橙色7.5YR6/6	内面器面荒れる（一部剥落）。 時期：後期。
図33-2	弥生土器 高坏 D-4 Ⅲ-1・2層	口径：　－ 底径：復14.2 器高：残 3.5	**器形**：体部は開きながら立上がり、脚部は強く外反する。／**調整**：内面体部横位の刷毛目が薄く残る。外面体部磨き（下に斜位の刷毛目が薄く残る）。／**残存**：脚台部片。	砂粒 良好 橙色7.5YR6/6	内面脚部剥落（使用痕か）。 時期：後期。
図33-3	弥生土器 高坏 C-5 Ⅱ-11層	口径：　－ 底径：　－ 器高：残 8.1	**器形**：脚台部は高め、体部は直線的に開く。／**成形**：脚台部上部は中実。／**調整**：体部一定方向の丁寧な磨き、外面体部～外面脚台部縦位の磨き。／**残存**：体部下位～脚台部上部片。	砂粒 良好 灰褐色7.5YR5/2	時期：後期。

表12　下層調査 土器観察表（1）

寸法欄：復は復元値，残は残存値を表わす。

番号	材質・器種 出土場所	寸法（cm）	器形・調整・残存等	胎土・焼成・色調	備考
図33-4	土師器 坏 D-5 Ⅱ-3層	口径：復12.2 底径：　6.6 器高：　4.0	**器形**：底部～体部は開きながら立上がる。／**調整**：外面体部下半は横位の連続する篦削り、内面～外面口縁部は横撫で。／**残存**：1/2。	小礫 良 橙色7.5YR6/6	
図33-5	土師器 坏 D-4 Ⅱ-3～5層	口径：復12.1 底径：復 7.2 器高：　3.6	**器形**：平らな底部～口縁部にかけては直線的に広がる。／**調整**：外面底部中央は一定方向の、周囲は回るような篦削り、内面～外面口縁部横撫で。／**残存**：1/4。	小礫 良好 橙色7.5YR6/6	
図33-6	土師器 坏 B-4 Ⅱ-3～5層	口径：復12.4 底径：復 8.2 器高：残 3.4	**器形**：底部～体部は開きながら立上がる。／**調整**：外面底部～体部下半削り、内面～外面口縁部は横撫で。／**残存**：1/4。	小礫 良 橙色7.5YR7/6	内外面器面荒れる。
図33-7	土師器 坏 D-5 Ⅱ-3層	口径：復12.2 底径：　7.2 器高：　3.4	**器形**：平らな底部～口縁部にかけては直線的に広がる。／**調整**：外面底部周囲は回るような篦削り、外面体部～内面は器面荒れており、観察不能。　**残存**：1/2。	小礫 良 橙色7.5YR6/6	内外面器面荒れる。
図33-8	土師器 坏 D-5 Ⅱ-6層	口径：復14.2 底径：復10.0 器高：　3.6	**器形**：底部～体部は開きながら立上がり、口縁部は角度が変わり直立気味になる。／**調整**：外面底部器面荒れており観察不能、外面体部下半横位の削り、内面～外面口縁部横撫で。／**残存**：1/2。	小礫 良 橙色7.5YR6/6	内外面器面荒れる。
図33-9	土師器 坏 B-4 Ⅱ-3～5層	口径：復13.5 底径：復 9.8 器高：　3.4	**器形**：底部～体部は開きながら立上がり、口縁部は直立気味。／**調整**：器面荒れており観察不能。／**残存**：1/4。	小礫多量 良 橙色7.5YR7/6	内外面器面荒れる。
図33-10	土師器 坏 D-5 Ⅱ-3層	口径：復13.6 底径：復 8.6 器高：　4.0	**器形**：底部～体部は開きながら立上がり、口縁部は角度が変わり直立気味になる。／**調整**：外面底部一定方向の篦削り、外面体部横位の篦削り、内面～外面口縁部横撫で。	小礫 良 橙色7.5YR7/6	
図33-11	土師器 坏 D-4 Ⅱ-3～5層	口径：復15.0 底径：復 8.6 器高：　3.8	**器形**：平らな底部～体部は丸味をもって開きながら立上がり、口縁部は外反する。／**調整**：外面底部から体部中・下位は撫で、内面～外面口縁部は横撫で、外面口縁部は強く篦され、稜線あり。／**残存**：1/4。	砂土質 良 にぶい黄橙色10YR7/4	
図33-12	土師器 坏 D-4 Ⅱ-3～5層	口径：復14.2 底径：復 9.2 器高：　2.9	**器形**：平らな底部～口縁部は開きながら立上がる。／**調整**：器面荒れており観察不能。／**残存**：1/4。	砂粒 良 橙色7.5YR7/6	内外面器面荒れる。
図33-13	土師器 坏 C-5 Ⅱ-9～16層	口径：復12.8 底径：復 9.0 器高：　4.3	**器形**：底部～体部は開きながら立上がり、口縁部は短く緩くくの字形に内傾する。／**調整**：内外面底部～体部削り（体部は横位の）、この後内外面口縁部強い横撫で。／**残存**：1/4。	砂粒 良 にぶい橙色7.5YR7/4	内外面器面荒れる。
図33-14	ロクロ土師器 高台付坏 D-5 Ⅱ-5層	口径：復16.5 高台径：復9.0 器高：　6.2	**器形**：低めの高台で高台際から体部は開きながら立上がる、高台外際に稜線あり。／**調整**：付け高台は撫で付け、高台外際回転削り、外面体部ロクロ撫で、内面～外面口縁部横撫で。／**残存**：1/3。	白色針状物質 良好 橙色5YR6/6	内面底部擦れている、平行沈線状の擦痕か。
図33-15	ロクロ土師器 皿 D-3 Ⅲ-4・5層(SK7)	口径：復14.8 底径：復 8.4 器高：　2.6	**器形**：体部は大きく開く。／**成形**：ロクロ、底部回転糸切。／**調整**：器面荒れて観察不能。／**残存**：1/4。	小礫 良 橙色5YR6/6	内外面器面荒れる。
図33-16	土師器 壺 B-4 Ⅱ-3～5層	口径：復24.4 底径：　－ 器高：残 5.3	**器形**：口縁部はくの字形に外反する。／**調整**：外面肩部横位の篦削り、後内外面口縁部横撫で。／**残存**：口縁部片。	砂粒 良 橙色7.5YR6/6	
図33-17	土師器 壺 D-5 Ⅱ-3層	口径：復29.0 底径：　－ 器高：残11.8	**器形**：口縁部はくの字形に外反し、胴部は強く張る／**調整**：器面荒れており観察不能。／**残存**：口縁～胴部上半片。	砂粒 良 橙色7.5YR6/6	内外面器面荒れる。
図33-18	土師器 壺 D-5 Ⅱ層	口径：復27.2 底径：　－ 器高：残18.3	**器形**：口縁部は緩いくの字形で外反し、胴部は肩部以外強く張る。／**調整**：内面口縁部と胴部の接合部は撫で付け。／**残存**：口縁部～胴部上半1/4。	砂粒 良 橙色5YR6/6	器面（内外面共）荒れて調整は観察不能。
図34-1	須恵器 坏 C-5 Ⅱ-9・10層	口径：復13.4 底径：復 8.0 器高：　3.6	**器形**：底部～体部は開きながら立上がる。／**成形**：ロクロ、底部手持ち篦削り。／**調整**：外面体部下半ロクロ撫で、内面～外面口縁部横撫で。　**残存**：1/2。	灰色粒、白色針状物質 良好 灰黄色2.5Y7/2	
図34-2	須恵器 坏 C-4 Ⅱ-3層より上層	口径：復12.6 底径：　6.6 器高：　2.7	**器形**：底径の広い底部から体部は開きながら立上がる。／**成形**：ロクロ、底部中央回転糸切、後周囲手持ち篦削り。／**調整**：内面～外面体部ロクロ撫で。／**残存**：1/2。	小礫、白色針状物質 良好 灰色N 5/	内面底部中央擦れる。

表12　下層調査 土器観察表（2）

寸法欄：復は復元値，残は残存値を表わす。

番号	材質・器種 出土場所	寸法（cm）	器形・調整・残存等	胎土・焼成・色調	備考
図34-3	須恵器 坏 D-5 Ⅱ-3層	口径：復11.8 底径：復 5.0 器高：　3.8	**器形**：底部～体部は開きながら立上がる。／**成形**：ロクロ、底部回転糸切。／**調整**：内面～外面体部ロクロ撫で。／**刻書**：外面底部焼成前に「X」か。／**残存**：1/3。	小礫、白色針状物質 良好 灰色7.5Y5/1	
図34-4	須恵器 坏 C-5 Ⅱ-3～5層	口径：復12.0 底径：復 5.2 器高：　3.7	**器形**：底部～体部は開きながら立上がる。／**成形**：ロクロ、底部回転糸切(右)。／**調整**：内面～外面体部ロクロ撫で。／**残存**：1/4。	小礫 良好 灰白色5Y7/1	内面底部中央擦れる。 ・括
図34-5	須恵器 坏 D-5 Ⅱ-5層	口径：復16.3 底径：　7.8 器高：　6.6	**器形**：底部～体部は開きながら立上がる。／**成形**：ロクロ、底部回転糸切り後に周囲回転削り。／**調整**：外面体部中・下位ロクロ撫で、内面～外面口縁部横撫で。／**残存**：1/4。	白色粒 良好 灰白色2.5Y7/1	外面底部焼成前刻書「一」。
図34-6	須恵器 高台付坏 C-5 Ⅱ-9層	口径：復16.3 底径：　8.0 器高：残 6.8	**器形**：高台は外傾し、体部は開きながら立上がる。／**成形**：ロクロ、底部回転(中心)糸切の後、付高台。／**調整**：内面～外面体部ロクロ撫で、高台内撫で付け、外面高台部～体部下位横位の回転篦削り。／**残存**：下半以下4/5。	砂粒 良好 灰白色2.5Y7/1	
図34-7	須恵器 高台付坏 D-5 Ⅱ-3層	口径：復16.0 底径：復 6.7 器高：　5.7	**器形**：高台部は低く外傾する、体部は開きながら立上がり口縁部は強く外反する。／**成形**：ロクロ、付高台。／**調整**：外面体部下半ロクロ撫での後、内面～外面口縁部横撫で。高台部周囲は回転撫で付け。／**残存**：1/2。	小礫 良、体部焼きボみ 灰色7.5Y5/1	
図34-8	須恵器 高台付坏 B-5 Ⅱ-9層	口径：　— 底径：　8.0 器高：復 3.4	**器形**：高台は外傾し、体部は開きながら立上がる。／**成形**：ロクロ、底部回転糸切(右)の後、付高台。／**調整**：内面～外面体部ロクロ撫で、高台周囲撫で付け。／**残存**：底部～高台部残。	小礫 良 灰色5Y5/1	内面の器面荒れる(顔は剥落)。
図34-9	灰釉陶器 碗 C-5 Ⅱ-9～12層	口径：復16.6 底径：復 8.0 器高：　4.8	**器形**：低めの高台から体部は腰が張り、口縁部は強く外反する。／**成形**：ロクロ、付高台。／**調整**：高台底周撫で付け、内面～外面体部ロクロ撫で。／**釉**：内面灰釉。／**残存**：1/4。	黒色粒 良好 灰白色2.5Y7/1	猿投窯(黒笹14号窯式)：9世紀第2四半期。
図34-10	灰釉陶器 碗 C-5 Ⅱ-5層	口径：　— 底径：復 8.0 器高：残 3.8	**器形**：高台部は高く、竹の節状、体部は大きく開く。／**成形**：ロクロ、高台内回転削りか糸切痕、付高台。／**調整**：高台周囲は雑な撫で付け、外面体部ロクロ撫で。／**釉**：内面灰釉。／**残存**：下半1/3。	黒色粒、砂粒 良好 灰白色7.5Y7/1	
図34-11	灰釉陶器 碗 B-5 Ⅱ-4層	口径：　— 底径：復 6.3 器高：残 2.1	**器形**：高台部は外傾し、体部は大きく開く。／**成形**：ロクロ、付高台。／**調整**：高台周囲は雑な撫で付け、外面体部下半ロクロ撫で、高台内中央には糸切痕残る。／**釉**：内面、外面体部上・中位灰釉。／**残存**：高台部1/2。	黒色粒 良好 灰白色7.5Y7/1	
図34-12	灰釉陶器 短頸壺 D-5 Ⅱ-7層	口径：復15.0 底径：　— 器高：残 8.4	**器形**：口縁部は短く、口唇部は平坦、胴部は中位に向けて大きく張る。／**調整**：内外面ロクロ撫で。／**釉**：内外口縁～外面に灰釉（ほとんど剥落）。／**残存**：口縁～胴部上部片。	黒色粒 良好 灰色N 5/	
図34-13	緑釉陶器 皿 C-5 Ⅱ-13～15層	口径：　— 底径：　— 器高：残 1.0	**器形**：低めの高台で高台外側には稜あり。／**残存**：底部片。緑釉は全て剥落。	緻密 良 灰色5Y6/1	

表13　下層調査 木製品観察表

寸法欄：残は残存値を表わす。

報告番号	器種・ 出土場所	寸法（cm）	遺存度	分類・器形・特徴等	備考
図版15 -3-写1	木製品 底板か C-5 Ⅱ-9～12層	長：残 11.6 幅：残　3.2 厚：　0.7	部材片	もとは円形の部材の一部で、残存部は半月形。弧状の縁辺は幅1cmで削り窪めてある。断面形はコの字形。	
図版15 -3-写2	木製品 底板か C-5 Ⅱ-9層	長：残 14.3 幅：残　5.0 厚：　0.9	部材片	もとは円形の部材の一部で、残存部は半月形。上面は黒色(漆か)。断面形はコの字形。	
図版15 -3-写3	加工木材 C-4 Ⅳ-1・2層	長：残　160 幅：残　35 厚：　12	部材片	丸木を1/3位を縦に割った木材で、攻口コの1面に平面状工具による削り痕が縦位につく。削りの方向は1方向で、、1箇所に数回歯を入れてここから削っている。材の長軸に直行する1cm位歯当たり痕が削り面のほぼ全面に残る。　工具痕の残る長さは122cm、幅13～14cm。上下端部共欠損し、外側は樹皮は残っておらず、腐食進む。芯側も削り痕以外の部分の腐食が進む。	

表14　下層調査　石製品観察表

寸法欄：残は残存値を表わす。

番号	器種 出土場所	寸法(cm)・重量(g)				特徴・使用痕	石質	備考
		長さ	幅	厚さ	重量			
図34-14	砥石 C-4区 Ⅱ3～5層	残8.2	残5.3	1.8	残147	元の形は長方体と思われる。砥面は表裏2面で、表面は下方がえぐれていて、ここに縦位の擦痕、裏面は平坦ですべすべ。	砂岩	
図版16 -1-写1	火打石 SI2層十	残2.6	2.3	1.1	11	ほぼ直方体形を呈すが、厚みは薄い。表面の一部に磨皮面残る。稜線の一部につぶれている箇所あり。	チャート (白色と黒色)	
図版16 -1-写2	火打石 D-3 Ⅱ-4・5層 (SK7)	残3.4	2.0	0.8	6	ほぼ三角形を呈すが、厚みは薄い。稜線の一部はつぶれている。	チャート (白色と黒色)	

表15　下層調査　転用石製品観察表

番号	器種 出土場所	寸法(cm)・重量(g)				特徴・使用痕	胎土 焼成	備考
		長さ	幅	厚さ	重量			
図34-15	転用砥石 E-4 Ⅲ-1・2層	9.8	4.7	0.7	47	須恵器の甕の胴部の破片を転用。砥面は側縁の一番長い割れ口を使用。須恵器は外面平行叩き目。	胎土：黒色粒 焼成：良好、自然釉降灰	
図34-16	転用砥石 D-5 Ⅱ-7層	9.0	6.3	0.8	57	須恵器の甕の胴部の破片を転用。砥面は側縁の割れ口1面を使用。須恵器は外面平行叩き目。	胎土：砂粒 焼成：不良	
図34-17	火打石 D-3 Ⅱ-4・5層 (SK7)	9.2	8.5	(最大) 1.1	132	須恵器の甕の頸部～肩部の破片を転用。砥面は、頸部上端の割れ口と、肩部端部の割れ口の2面。前者は置き砥、後者は手持ち砥の使用法と考えられる。須恵器は外面平行叩き目、内面同心円叩き目。	胎土：砂粒 焼成：良好	

表16　下層調査 土製品観察表

寸法欄：残は残存値を表わす。

番号	写真No.	器種 出土場所	寸法（cm）	器形・調整・残存等	胎土・焼成・色調	備考
図版16 -3-写1	下層-写1	土錘 D-6 Ⅲ-4層	長　：残2.3 最大径：　1.1 重　量：残2g	**器形**：紡錘形と思われる、穿孔の直径は0.4cm。／**調整**：外面撫で、一面は平らになっている。　**残存**：1/3。	粉質 良 にぶい黄橙色10YR6/4	

表17　下層調査 中世陶器、土器観察表

寸法欄：復は復元値，残は残存値を表わす。

番号	材質・器種 出土場所	寸法(cm)	器形・成形・調整・釉・残存等	胎土・焼成・色調	生産地 年代	備考
図35-1	陶器 片口鉢 C-6 Ⅰ層	口径：　－ 底径：　－ 器高：残 5.9	**器形**：高台は高く、体部は外側に向かって開く。／**成形**：ロクロ、付高台。／**調整**：外面体部横位の削りの後、高台を貼付けて強で調整。／**残存**：底部片。	小礫 良好 灰黄色10YR6/2	常滑窯 13世紀後半	内面擦れて滑らか。
図35-2	陶器 片口鉢 C-5 Ⅰ-3層	口径：　－ 底径：　－ 器高：残 5.2	**器形**：体部は開きながら立ち上がる。／**成形**：ロクロ。付高台。／**調整**：内面体部、外面体部中位ロクロ撫で、外面体部下位横位(左回転)の削り、高台周囲回転撫で。／**残存**：底部片。	小礫 良好 灰白色10YR7/1	常滑窯 13世紀	内面擦れている。
図35-3	土器 かわらけ C-5 Ⅰ-4層	口径：復10.6 底径：復 6.4 器高：　2.3	**器形**：体部は開きながら立ち上がる。体部の器壁は厚め。／**成形**：ロクロ。／**調整**：器面荒れて観察不能。／**残存**：1/4。	赤色粒 良 橙色5YR6/8	在地 14世紀	器面荒れる。底部焼成後穿孔。
図35-4	土器 かわらけ C-3 Ⅱ-1層	口径：　－ 底径：　6.0 器高：残 1.7	**成形**：ロクロ水挽き、底部回転糸切り(右)。／**調整**：器面荒れて観察不能。／**残存**：1/2。	砂粒 良 にぶい橙色7.5YR6/4	在地 14世紀	
図34-5	土器 かわらけ C-5 Ⅱ層	口径：　－ 底径：5.6～6.0 器高：残 2.5	**器形**：底部～体部は開きながら立上がる。／**成形**：ロクロ、底部回転糸切り(右)。／**残存**：3/4。	小礫、赤色粒 良 橙色2.5YR6/8	在地 14世紀	
図版15 -1-写1	瓦器 埴 ＊	口径：復 5.5 底径：　－ 器高：残 2.0	**器形**：開きながら立ち上がり、口縁部は直立気味。／**調整**：内外面横位の磨き(外面は雑)。／**色**：灰白色10YR8/1／**残存**：口縁部片。	緻密 良好 内外：灰色N5/	大坂 13世紀	「蓮葉形」
図版15 -1-写2	陶器 大皿 ＊	口径：復 8.5 底径：　－ 器高：残 3.1	**器形**：口縁部は直線的に広がる、直口縁。／**成形**：ロクロ水挽き。／**釉**：内外口縁部灰釉(白濁)、以下無釉。／**残存**：口縁部片。	やや粗い 良 にぶい黄色2.5Y6/3	瀬戸・美濃 14・15世紀	
図版15 -1-写3	陶器 緑釉皿 ＊	口径：復 5.0 底径：　－ 器高：残 1.5	**器形**：丸皿形。／**成形**：ロクロ水挽き。／**釉**：内外口縁部灰釉、以下と外面無釉、内面火色出る。／**残存**：口縁部片。	やや粗い 良好 灰白色5Y8/1	瀬戸・美濃 14・15世紀	
図版15 -1-写4	陶器 大甕 ＊	口径：　－ 底径：　－ 器高：残 6.0	**調整**：内外面撫で。／**器面**：外面ケリが出る。／**残存**：肩部片。	白色・透明粒 良好 灰黄褐色10YR5/2	常滑窯 14・15世紀	外面擦れている。

＊A～C-5・6、C-7 Ⅰ-1・3層・Ⅱ-4・5・9層

表18　下層調査 近世～近代陶磁器観察表

寸法欄：復は復元値，残は残存値を表わす。

番号	材質・器種 出土場所	寸法(cm)	器形・成形・調整・釉・残存等	胎土・焼成(・色調)	生産地 年代	備考
図版15 -2-写1	磁器 碗 ＊	口径：復 5.5 底径：　－ 器高：残 3.3	**器形**：丸碗形。／**成形**：ロクロ水挽き。／**文様**：染付、外面体部菊花文。／**残存**：口縁部片。	白色・粉質 良好	肥前 19世紀前半	
図版15 -2-写2	磁器 碗 ＊	口径：復 4.2 底径：　－ 器高：残 2.4	**器形**：端反形。／**成形**：ロクロ水挽き。／**文様**：染付、内面口縁部2重圏線、外面体部花と「寿」字文。／**残存**：口縁部片。	白色・ガラス質 良(器面白濁)	瀬戸・美濃 19世紀第2四半期	
図版15 -2-写3	磁器 碗 ＊	口径：　－ 底径：　－ 器高：残 2.0	**器形**：平碗。／**成形**：ロクロ水挽き、削出し高台。／**文様**：染付(人工呉須)、内面底部文様あり(型紙摺)、外面体部区画割菊花文、如意頭文(型紙摺)。／**残存**：底部片。	白色・ガラス質 良好	瀬戸・美濃 19世紀末	
図版15 -2-写4	磁器 碗 ＊	口径：復 6.5 底径：復 2.7 器高：　4.4	**器形**：平碗、体部は大きく広がりながら立上がる。／**成形**：ロクロ水挽き、削出し高台。／**文様**：染付(人工呉須)、内面体部瓜と草文。／**残存**：1/6。	白色・ガラス質 良好	瀬戸・美濃 19世紀末	
図版15 -2-写5	磁器 碗 D-6 Ⅰ-3層	口径：　－ 底径：　－ 器高：残 4.5	**器形**：筒形の容器か。／**文様**：染付(人工呉須)、外面体部ミジンコ唐草文(型紙摺)、その下部は如意頭唐草文崩れ。／**残存**：3/4。	白色・ガラス質 良好	肥前 19世紀末	
図版15 -2-写6	陶器 土瓶 ＊	口径：　－ 底径：復 4.5 器高：残 1.6	**器形**：蓋受部は直立し、内側下端には内面に水平に突出する受部あり。／**文様**：鉄で文様を描き、緑釉も併用。／**釉**：外面透明釉、内面無釉。／**残存**：口縁部片。	緻密 良好 灰白色5Y8/2	産地不明 19世紀前半	

＊A～C-5・6、C-7 Ⅰ-1・3層・Ⅱ-4・5・9層

ないながら、最下層のⅣ層からの点数が多い。これは層位と見合った出土状況ではあるが、数の少なさからみれば、遺構も検出されておらず、この遺跡の土地利用も消極的である。弥生土器は総点数では縄文土器の20倍以上の数がみられる。Ⅱ層の上層（2～5層）と、下層（13～16層）にピークがみられ、Ⅱ層の下層より上層に集中する傾向がある。奈良、平安時代は主要な遺物である土師器、須恵器でみれば、Ⅱ-3～5層に突出したピークがあり、それより下層でも数は減じるものの相当数が出土している。Ⅱ層の最下層まで一定の数はみられる。ただ、縄文土器や弥生土器と違い、Ⅳ層からの出土はない。

中世以降の出土場所、層位は上記のように調査区南端部の溝に集中しているが、この溝はⅠ-1～5層を掘削したもので、これらの層は大規模な盛土造成土である。遺物数は縄文土器の3倍であるが、時代毎でみればそれほどの差異はない。この盛土がどこから運ばれてきたのかは不明であるものの、盛土の年代の下限は、出土遺物からは19世紀末と考えられる。

第6章　鎌倉市陣出遺跡の地形・地質環境とテフラ分析

神奈川災害考古学研究所　上本進二

1. 遺跡の地形・地質環境

遺跡は鎌倉市寺分の柏尾川左岸の標高8～9mの広大な氾濫低地にある（図36左図）。この低地は約5500年前の縄文海進時には古大船湾の海域になっており、現地表下5mの標高3～2.5mにハマグリなどの内湾砂地の干潟底に棲む貝類群集が検出されている（松島2006）。縄文海進最盛期の古大船湾は湾奥部が戸塚駅北方まで達していたと考えられ、現在の標高にすると縄文海進後の隆起量も加わって約15～20mになるであろう（上本2000）。

遺跡周辺は、図36右図のように、縄文海進後の海退期には、柏尾川が大きく蛇行していた時に形成された蛇行帯であり、河跡湖（三日月湖）があったと想定される（上本2000）。柏尾川が遺跡付近で大きく蛇行している理由は、遺跡の北西約300mにある標高37.0mの旗立山と南に延びる尾根があるために流路が迂回したからであろう。現在、柏尾川の氾濫低地は盛土で埋られているが、地下には泥や粘土質の堆積物が厚く堆積している。

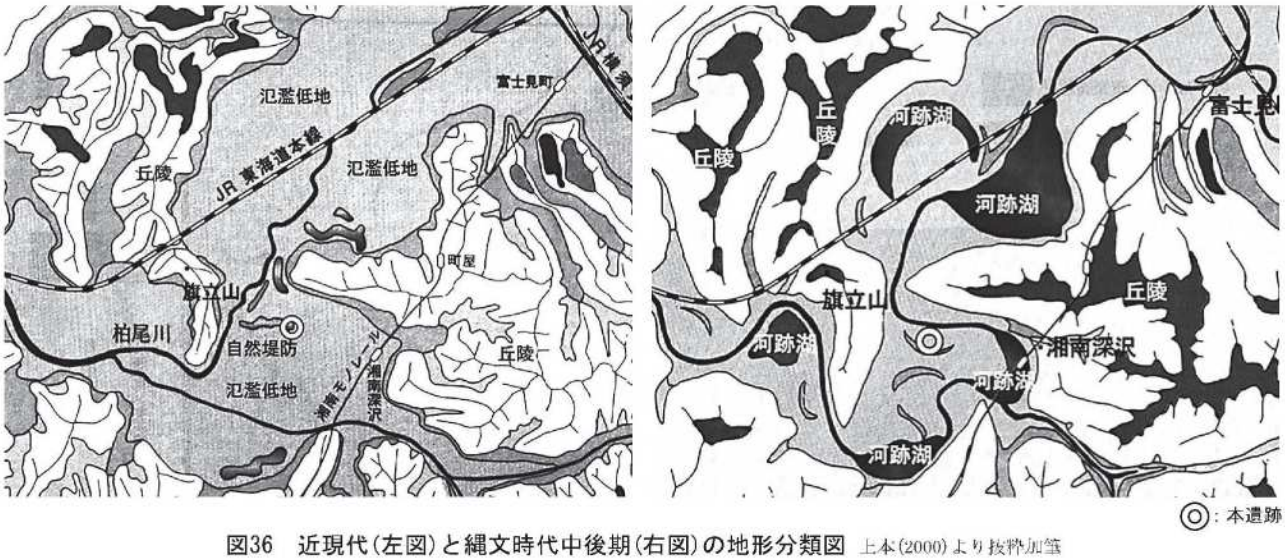


図36　近現代（左図）と縄文時代中後期（右図）の地形分類図　上本(2000)より抜粋加筆

本遺跡は富士山の真東から約3°南、約70km東にある。本遺跡は氾濫低地であったために、テフラ層の堆積は自然堤防上に限られ、湿地には一次堆積のテフラと流れ込みの二次堆積テフラが泥層や粘土層内に混在する状態である。一次堆積のテフラと二次堆積のテフラは、円磨度や風化の程度を顕微鏡下で見分けてテフラを同定した。

2. テフラ分析の方法と結果

テフラ分析の方法は、試料を腐植物と風化物質が完全に無くなるまで洗浄し、自然乾燥させ、10～20倍のファイバースコープで観察し、写真を撮影した。その結果から、富士系スコリアや岩片の諸特徴からテフラ層序学的区分（上本・上杉1996・2010；上杉1990・2003・2011）に基づいて同定した（表19）。

a) 調査区東壁のテフラ試料（2023年10月7日採取）

以下の11箇所で採取した試料の採取位置は平面図（図37-1）とセクション図37-2、写真5～7参照。

試料1～7は、D-6区東壁サブトレンチの盛土：下底から135cmまでは腐植質粘土層で、その中に褐鉄やテフラが含まれており、7箇所で試料を採取してテフラ分析を行なった。

試料1～3は、宝永スコリアの特徴である縞状軽石（大きいものは20mm）と火山砂を多量に含む二次堆積の宝永スコ

リアである。1mm以下の鉱物砂を大量に含み、凝灰岩片は最大5mmであった。盛土に加えて河川によって運ばれた堆積物と考えられる（写真8～10）。

試料4・5は宝永スコリアを含まない粘性土中のテフラである。最も特徴的なのは円磨されていない未風化の赤褐色溶岩片（還元色は薄灰紫色）と短柱状スコリア（やや円磨）であった。これらのテフラが含まれるのは、10～11世紀のS-24-8-2～S-24-9であることから、10～11世紀のテフラの一次堆積または二次堆積と考えた（写真11・12）。

試料6・7は、泥層や粘土層の中でスコリアが粘土化していたのでテフラの一部を採取できなかった。風化に強い被膜を持つ赤色溶岩片や斜長石などのテフラ鉱物の組み合わせから、937年に富士山から噴出したS-24-8-2の可能性がある（写真13・14）。

試料8はD-6区東壁トレンチ底の青灰色の還元色を示すスコリアを含む粘性土である。スコリアは風化していたが、牛糞状スコリアがわずかに含まれていたほか、赤色溶岩片と斜長石・カンラン石などやや円磨されたテフラ鉱物が含まれていたので、S-24-7～8（延暦貞観スコリア）の二次堆積と考えられる。延暦貞観スコリアは802年と864年の富士山噴火のテフラである（写真15）。

試料9はC-6区南壁の薄灰茶色軽石である。宝永噴火の最初に降下した縞状軽石であった（写真16）。

試料10はD-6区の盛土のような土層中から採取した薄灰茶色軽石である。宝永スコリアの縞状軽石（やや円磨）12mmと硬質凝灰岩礫15mmであった（写真17）。

試料10'は試料10と同じ土層の薄茶色軽石を含む砂質土である。宝永スコリアの縞状軽石を含む砂質土であった（写真18）。

試料9～10'の採集地は、宝永スコリアを含む土砂の堆積層と思われる。

D-4区一括は、遺物として取り上げられた宝永の縞状軽石である（写真19）。

表19　テフラ分析結果

試料No.	テフラの特徴	テフラ名	堆積年代
試料1（写真8）	宝永スコリアの火山砂多量　縞状軽石　砂　円礫 土丹（凝灰岩）など	宝永スコリアの二次堆積	1707年以後
試料2（写真9）	宝永スコリアの火山砂多量　縞状軽石9mm　砂　円礫 土丹（凝灰岩）など	宝永スコリアの二次堆積	1707年以後
試料3（写真10）	宝永スコリアの縞状軽石20mmと火山砂多量　砂　円礫 土丹（凝灰岩）など	宝永スコリアの二次堆積	1707年以後
試料4（写真11）	短柱状スコリア（やや円磨）　薄紫色～赤褐色溶岩片堆積 川砂堆積層	S-24-9～S-24-8-2	10～11世紀以後
試料5（写真12）	短柱状薄紫色～赤褐色スコリア（やや円磨） 川砂堆積層　大量の石英などの鉱物砂が含まれる	S-24-9～S-24-8-2?	10～11世紀以後
試料6（写真13）	細砂を含む粘土層　斜長石など円磨されたテフラ鉱物 赤色溶岩片　黒色鉱物	S-24-8-2?	937年?
試料7（写真14）	角礫5mm　斜長石など円磨されたテフラ鉱物　赤色溶岩片 牛糞状スコリア　カンラン石	S-24-8-2?	937年?
試料8（写真15）	斜長石などやや円磨されたテフラ鉱物　赤色溶岩片 牛糞状スコリア　カンラン石　スコリアは溶けているか	S-24-7～8 二次堆積か?	9世紀?
試料9（写真16）	宝永スコリアの縞状軽石（やや円磨）12mm	宝永スコリア	1707年
試料10（写真17）	宝永スコリアの縞状軽石（やや円磨）12mm 硬質凝灰岩礫15mm	宝永スコリアの二次堆積	1707年以後
試料10'（写真18）	宝永スコリアの縞状軽石（円磨）12mmを含む宝永火山砂 凝灰岩の円礫なども含む　宝永の廃棄か?	宝永スコリアの二次堆積	1707年以後
D-4区一括（写真19）	宝永スコリアの縞状軽石	宝永スコリア	1707年
試料11（写真21）	S-13（砂沢ラピリ）　縞状軽石　火山砂　赤色溶岩片　河床礫	河床堆積物	?
試料12（写真22）	S-13（砂沢ラピリ）　縞状軽石　火山砂　赤色溶岩片　河床礫 イネ科の植物の茎を核にした褐鉄	河床堆積物	?
試料13（写真23）	円磨された牛糞状スコリア　斜長石付スコリア	延暦貞観スコリアの二次堆積	800年以後
試料14（写真24）	赤色溶岩片多量　牛糞状スコリア　斜長石付スコリア 一次堆積のS-24-8	貞観スコリア	864～937年

b) C-6区北壁のテフラ試料(2023年12月18日採取)

下層調査の西深掘り区北壁(写真20)には、下位から灰色粘土層、黒色土層、褐色土層(二次堆積の宝永スコリアを含む)が堆積している。灰色粘土層は縄文海進後の海退期に堆積した内湾性の粘性土で、木材や岩塊が入っている。黒色土層はテフラを含む黒色シルト～粘土層で、試料11～14を採取した(試料の採取位置はセクション図37-3参照)。褐色土層(Ⅰ-1～6層のうちの上層(Ⅰ-1～Ⅱ-5層))は二次堆積の宝永スコリアを含む人工的に運ばれた土層で、最下部中層(Ⅱ-6層)に褐鉄層が形成されている。

試料11は、盛土の褐鉄層直下の淡黒褐色土で、円磨された砂層の中にS-13(砂沢ラピリ)・火山砂・赤色溶岩片を検出した(写真21)。河川堆積物の腐植質粘土と砂に交じってS-13(砂沢ラピリ)や他のテフラが混入している。S-13(砂沢ラピリ)は宝永スコリアに酷似しており、風化しにくい鉱物砂主体の縄文時代後期後半の富士山のテフラである。

試料12は、黒色土層にあって、試料11と同じく、S-13(砂沢ラピリ)や他のテフラが混入している。この層には写真22の葦のようなイネ科の植物の茎を核にした褐鉄が含まれていることから、葦原のような環境であったと思われる。

試料13は、黒色土層下位にあって、円磨された牛糞状スコリアや斜長石付スコリアを含むので、延暦貞観スコリアの二次堆積である(写真23)。

試料14は、黒色土層最下位にあって、S-24-8(貞観スコリア)特有の赤色溶岩片が目立ち、牛糞状スコリアや斜長石付スコリアを含む。試料13よりもスコリアが円磨されておらず、貞観スコリアの一次堆積である(写真24)。

c) 下層調査西深掘り区底から出土した岩塊

下層調査西深掘り区底には多数の材とともに岩塊が出土したが、巨礫であったために取り上げることができなかったので一部を打ち欠いて岩質を調べた(写真25)。岩質は軟質粗粒凝灰岩で、2-3mmの多数の凝灰質の泥岩片を粗粒の凝灰質砂岩が取り込んでいる。この岩塊は遺跡付近の浦郷層の岩石が洪水時に運ばれたと思われる。

3. 遺跡の地形発達史

遺跡が立地する柏尾川左岸の氾濫低地は、縄文海進後の海退期に柏尾川が丘陵の間を流れる蛇行帯を形成し、河跡湖(三日月湖)や自然堤防が入り混じる低湿地であった(図36右図)。平安時代初期までは柏尾川沿いの低地には流水が運んだ砂やシルトが堆積する低湿地であったが、9世紀にはいると腐植質を多く含む土壌が形成されたことから、川の影響をあまり受けなくなり、植物が繁茂する低湿地になったと思われる。

9世紀～11世紀の平安時代には富士山のテフラが度々降下するが、それらは黒色腐植質層や粘土層中に堆積していることから、低湿地であったことは確実である。葦のようなイネ科の植物の茎を核にした褐鉄(写真22)も検出されたので、葦原のような環境であったと思われる。宝永スコリア降下までの間に腐植質の堆積物が120cm堆積している。12～17世紀の間は富士山のテフラは本遺跡に堆積していないので、この間の環境変化は不明である。

1707年の宝永スコリア降下によって、低湿地の環境は劇的に変わる。宝永スコリアは遺跡付近で約20cm堆積しており(宮地・小山2007)、二次堆積の宝永スコリアを含む大量の砂や岩片が層厚40cmも堆積していることから、低湿地に宝永スコリアを含む大量の土砂が運ばれたと思われる。

〖引用文献〗

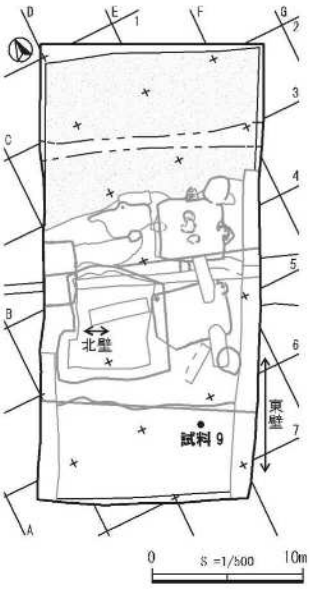
上杉　陽(1990)「富士火山東方地域のテフラ標準柱状図-その1:S-25～Y-114」.『関東の四紀16』, p3-28

上杉　陽(2003)『地学見学案内書富士山』, 日本地質学会関東支部発行, 117p

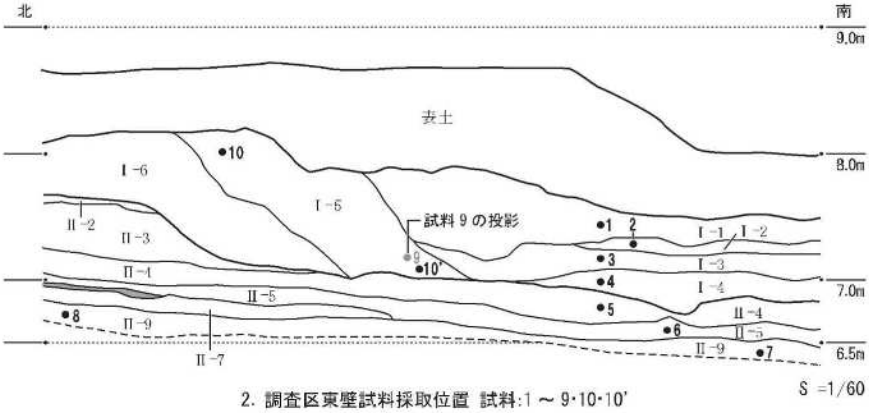
上杉　陽(2011)「富士吉田市上暮地新屋敷遺跡の降下火山砕屑物層序(その1)」.『富士吉田市文化財調査報告書第8集』, 富士吉田市教育委員会歴史文化課編, 160p

上本進二・上杉　陽(1996)「神奈川県のテフラ層と遺跡層序ー考古学のためのY-No.・S-No.ー分層マニュアル」.『関東

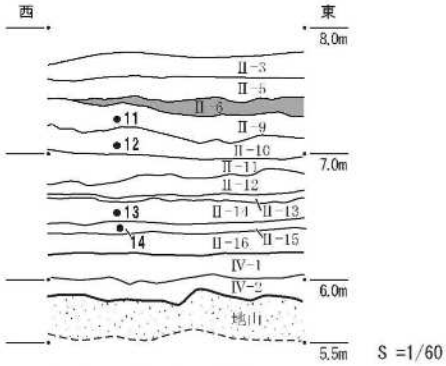
の四紀20』, p3-24
上本進二・上杉　陽（2010）「神奈川県のテフラ層と遺跡層序ー考古学のためのY-No.・S-No.ー分層マニュアルⅡ」.『関東の四紀30』, p3-26
上本進二（2000）「鎌倉・逗子低地の地形発達史と遺跡形成」.『神奈川県逗子市桟敷戸遺跡発掘調査報告書』, p227-246,（仮称）医療保健センター建設地内埋蔵文化財発掘調査団・東国歴史考古学研究所, 310p
松島義章（2006）『貝が語る縄文海進－南関東＋2℃の世界』, 有隣新書, 有隣堂, 219p
宮地直道・小山真人（2007）「富士火山1707年噴火（宝永噴火）についての最近の研究成果」.『富士火山2007』, p339-348, 山梨県環境科学研究所



1. 試料採取場所



2. 調査区東壁試料採取位置 試料:1 ～ 9･10･10'



3. 北壁試料採取位置 試料:11 ～ 14

図37　試料採取場所

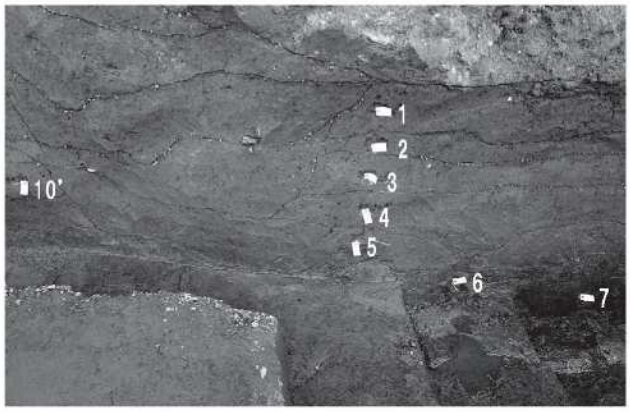


写真5　試料1～7･10' 採取位置

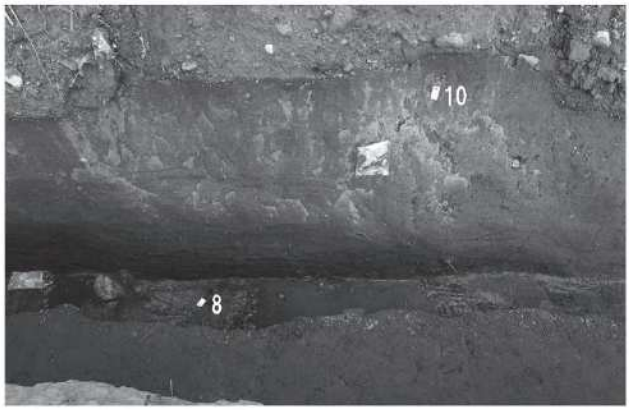


写真6　試料8･10採取位置

写真7　試料9採取位置

写真8　試料1 宝永スコリアの火山砂

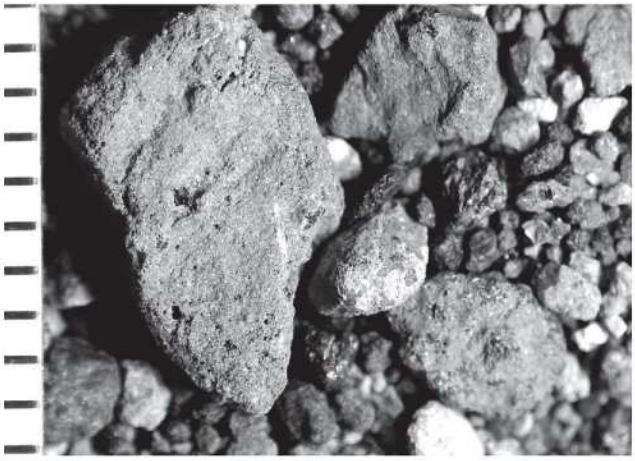


写真9　試料2 宝永スコリアと縞状軽石9mm

写真10　試料3 宝永スコリアの軽石20mm

写真11　試料4 S-24-8-2～S-24-9

写真12　試料5 S-24-8-2?～S-24-9

写真13　試料6 S-24-8-2?

※写真の目盛は1mm

写真14　試料7 S-24-8-2?

写真15　試料8 S-24-7～8 二次堆積か?

写真16　試料9 宝永スコリアの縞状軽石

写真17　試料10 宝永スコリアの縞状軽石

写真18　試料10' 河床礫と砂沢ラピリや他のテフラが混入

写真19　D-4区一括 軽石 宝永スコリアの縞状軽石

※写真の目盛は1mm

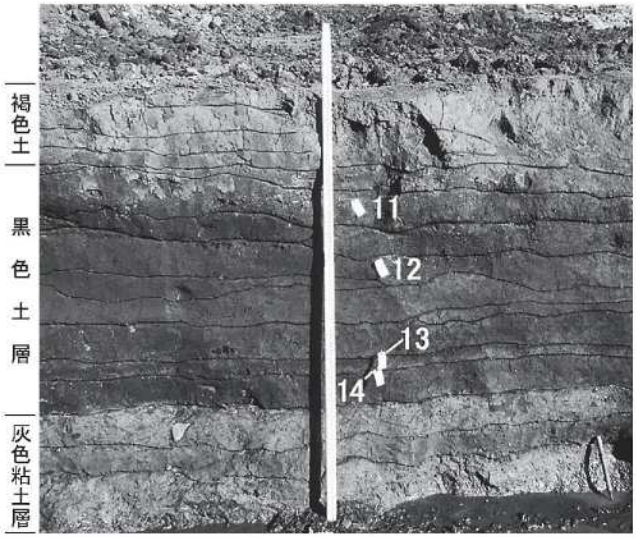


写真20　トレンチ北壁土層と試料採集位置

写真21　試料11 河床堆積物、砂沢ラピリなど二次堆積の
テフラを含む

写真22　試料12 中の褐鉄 直径9㎜

写真23　試料13 延暦貞観スコリアの二次堆積

写真24　試料14 貞観スコリアの赤色溶岩片

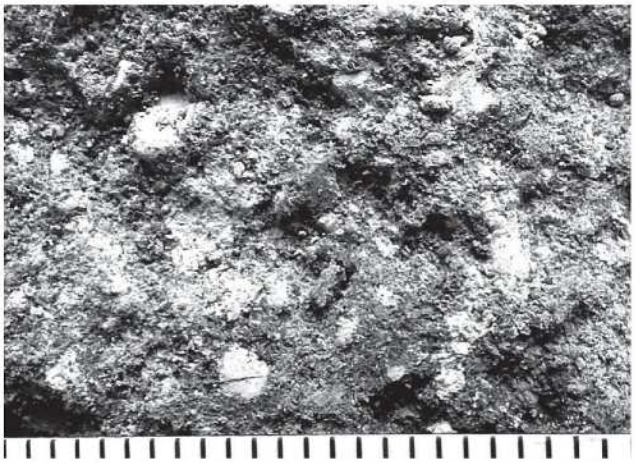


写真25　下層調査 西深掘り区底の岩塊 軟質粗粒凝灰岩

※写真の目盛は1㎜

第7章　まとめ

本調査地点は、陣出遺跡の初めての本発掘調査である。鎌倉市遺跡地図には、その性格は社寺跡？、遺物散布地、時代は奈良・平安・中世として周知化された複合遺跡である。ここでは、調査結果を踏まえて、時代別の土地利用の変遷、包含層について、検出された竪穴建物の竈の構造の特徴の3点について取り上げて、理解を深めると同時に問題点を明らかにしておきたい。

1. 時代別の土地利用の変遷

本遺跡で検出された遺構は、奈良・平安時代の竪穴建物4軒、土坑4基である。遺物は縄文、弥生、奈良、平安、中世、近世～近代の各時代のものが出土した。以下に時代ごと様相をまとめる。

縄文時代　遺構は検出されず、土器と石器（剥片含む）が出土したが、土器を中心に述べれば、数は僅かであり、時期は早期後半、前期前半と後半、中期前半と後半である。層位からみても表面採取、Ⅱ層、Ⅳ層と散在していて、混入と考えられる。

弥生時代　縄文土器と同様に遺構は検出されず、土器のみが出土されたが、縄文土器よりかなり数は多い。特に、東壁サブ・トレンチ（D・E-5区）のⅢ-1・2層からは実測遺物が集中して出土しており（この発見が下層調査のきっかけとなった）、近辺での竪穴建物の存在を窺わせる。時期は中期と後期がみられる。後期は前述のようにまとまっての出土量があるが、中期も大小の壺が出土している。本遺跡の地理的条件を考えると居住空間や水田経営まで視野に入れての展開が想定される。

奈良・平安時代　竪穴建物が4軒検出された。竪穴建物の廃棄年代は、出土遺物の様相から、SI4が8世紀の奈良時代で古く、SI1とSI2は9世紀後半、SI3は9世紀といずれも平安時代前期と推定される。下層調査も含めてこの時代の遺物は、本調査地点での出土量の大部分を占めており、主要な展開時代とみなすことができる。

中世　遺構はなく、遺物の数も少なく、出土層位からは下層や上層への混入と思われるが、器種からみると捏鉢やかわらけ等で生活の痕跡が窺える資料である。遺物の年代が中世前半に偏る傾向がみられるのは、本遺跡が都市鎌倉の近郊に組み込まれた結果とも考えられよう。

近代　調査区南半部に展開する盛土造成（Ⅰ層）と丸杭やコンクリート杭が打設される時代である。Ⅰ層は傾斜していた調査区南半部を平坦にするように厚さ0.7～1.0mで一気に造成されている。その後、コンクリート杭が打設されている。この両者はどちらも調査区の東西、南側に延びる大規模な造成である。出土遺物は少ないが、その年代の下限は19世紀末と推定される。図38-3は、本遺跡周辺の昭和3～20（1923～45）年の地図である。調査区を北限として、軍需工場:横須賀海軍工廠深沢分工場が建設されたのは昭和17（1942）年である（それ以前の図38-2 大正6～13（1917～24）年の地図では調査区の周りの沖積地は水田となっている）。図39はこの分工場に学徒勤労動員された生徒達によって描かれた分工場の平面図である（註1）。この建物配置は、図38-3の建物群とほぼ一致している。Ⅰ層形成の契機はこの時の盛土造成によるものと考えられる（註2）。また、本遺跡の西側を流れる柏尾川は近代になっても氾濫を繰り返していたが、20世紀初め以降、流路を整備し、氾濫原には盛土造成が行われて近代化が進められたという（註3）。なお、この分工場は戦後の昭和20（1945）年に日本国有鉄道の大船工場となったが、平成18（2006）年に閉鎖されている。

1. 明治 15 (1882) 年 迅速測図

2. 大正 6 ～ 13 (1917 ～ 24) 年
国土地理院二万五千分一地形図

3. 昭和 3 ～ 20 (1928 ～ 45)年
国土地理院二万五千分一地形図

◀：調査地点

図38　近代の調査地点周辺

図39　横須賀海軍工廠造兵部深沢分工場計画図
(昭和20 (1945) 年1月)

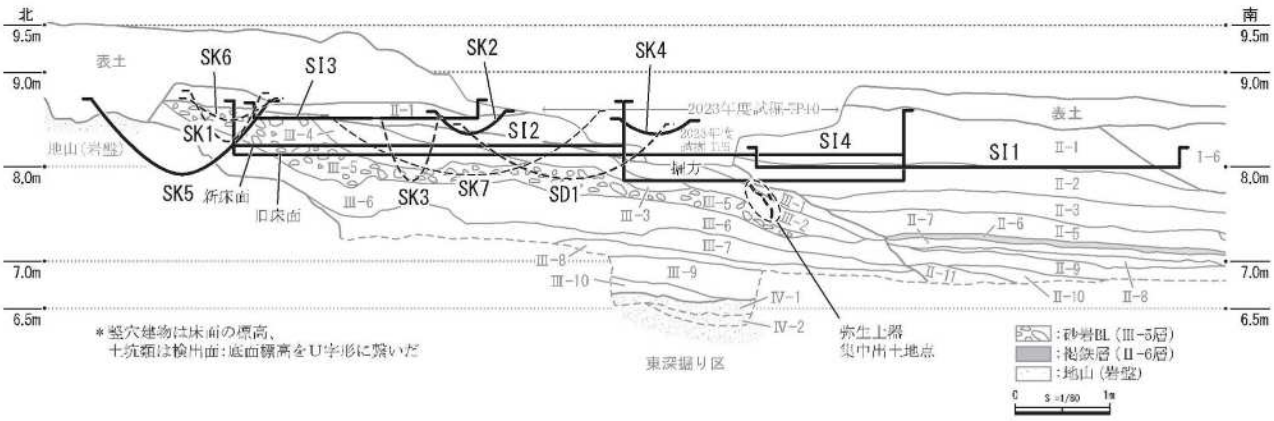


図40　東壁土層断面への遺構投影図